

実践報告

Skype を活用した 初級日本語教育プログラム

中俣尚己・岩崎瑠莉恵・荻原知世・中野仁美・山上聡美

1. はじめに

この実践報告では、2011 年度に実践女子大学大学院国文学専攻の博士前期課程1年生が行った Skype を活用した初級日本語教育プログラムの理念、実践、成果について報告をする。この実践報告の構成は以下の通りである。まず、2. で筆者が Skype を活用した日本語教育に関わるようになった経緯とこの活動の意義について述べる。3. で 2011 年度の活動の概要について述べる。4. では成果について述べ、活動報告のポイントをまとめる。5. から 8. は実際に参加した大学院生による報告である。9. では今後の課題を示す。

なお、5. から 8. はそれぞれの筆者を節タイトルとともに示す。1. から 4. と 9. は中俣が執筆した。

2. Skype を活用した日本語教育プログラムの理念と経緯

近年、日本語学習者が増加し、日本語学習者のニーズが多様化しており、このような多様性に対応できる能力をもった日本語教師を養成することが必要になっている。日本語教育はほとんどの日本人学生がそれまで経験したことのない教育であるという点で、他の学校教育の科目とは異質であるが、その一方で、実際の教育実習の機会は学校教育のそれよりも少ないことが大半である。大抵の教育機関では 1 回か 2 回の授業を行うことが精一杯である。これは学習者の学習機会を尊重するためには止むを得ないことであり、多くの日本語教師養成機関が共通して抱える問題である（岡本 2005）。

しかし、1 回か 2 回の授業では教師に必要なスキルの一面のみしか重視されないと言える。曾余田・岡東（2002）は「21 世紀に通用する教師」のスキル

として「1. 目に見える実践的技量（テクニカル・スキル）」「2. 人間の内面的な思考様式にかかわる技量（コンセプチュアル・スキル）」「3. 教員と子ども、教員同士の関係などに必要な技量（ヒューマン・スキル）」の3つを挙げる。しかし、実際の実習で重視されるのは「どのように導入を行うか」「どのようなタスクを選ぶか」といったことであり、そしてそれはもちろん不可欠なことであるが、どうしてもテクニカル・スキルにのみ偏ってしまう。準備期間が限られることもあり、コンセプチュアル・スキルやヒューマン・スキルまでは手が回らないというのが現状ではないだろうか。いずれの技量も熟達には時間がかかることはもちろんであるが、特に人間関係などに関わる技量についてはある程度の時間をかけなければ何も見えて来ないと考えられる。

他方で、海外で日本語を学ぶ学生は、生の日本語との接触が極端に少ないという問題点を抱えている。そこで、長期にわたる日本語教育の実習機会を求めている日本側と、日本語による話し相手を求めている海外側のニーズをマッチングし、無料のテレビ会議ソフト Skype を用いた日本語の会話演習プログラムを行うことにした。

具体的には2010年度に、当時の筆者（中俣）が所属していた京都外国語大学とハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジとの間で10月から12月にかけて実施した。この実践の内容と評価は中俣・岸・片岡（2011）にまとめであるが、その成果としてはハワイの学生の日本語力、日本の学生の日本語教育能力の向上に関しては否定的な自己評価が多かったが、日本語教育に関する関心や、ICT（Information Communication Technology）を活用した教育に関する関心については高まったとする声が多く、主に動機面での成果が見られた。これは教室型の授業で高めることは難しいもので、複数回にわたって直に学習者と接する活動の特性によるものであると考えられる。

2011年度に筆者は実践女子大学に着任したが、日本語教育の実習が不足しているという問題点は同じであった。そこで、2011年度は実践女子大学、京都外国語大学とハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジの3校で Skype 交流活動を行った。実践女子大学では初の試みであったこと、また、2010年度の実践から、4年生など日本語教育に関する経験の多い学生ほど顕著な変化が見られたことから、2011年度は博士前期課程1年生の大学院生4名のみを対象とすることにした。4人の専門は日本語学であり、その研究活動は必ずしも教育現場と直結したものではない。だからこそ、この活動を通じて、実際の学習者とのコミュニケーションの大切さを学んでもらおうという意図があった。

3. 実践の詳細

活動は2011年の9月から12月にかけて行った。カピオラニ・コミュニティ・カレッジで日本語を学ぶ初級後半から中級前半の学習者20名と、京都外国語大学の学部生16名、実践女子大学の大学院生4名がペアとなった。活動は週に1回、最大1時間とし、ハワイの学生が授業で使用している教科書の内容を参考に語彙や会話の練習を行うという指針を立てたが、学習者の能力や動機も様々であったため、実践女子大学の4名に関しては各自の判断で適切と思える活動を考えてもらった。各人がどのような実践を行ったかについては5. ～8. を参考にして頂きたい。ルールとして、基本的には日本語のみを使用し、補助的にチャットなどを使うという指示は徹底した。

活動後は、京都外国語大学の日本語教員養成SNS「JapaS」（詳細は由井・中西・中俣2010、中俣・中西・由井2011を参照）に活動の報告を行なってもらった。しかし、活動回数が平均で10回を超えたのに対して、書き込みは1人平均3回に満たず、あまり有効に活用されたとは言えなかった。これは他大学のSNSであったということと、ログインの煩雑さなどが原因であるといえる。

また、活動前に2回、活動後に1回、京都外国語大学ともSkypeでつなぎ、ミーティングを行った。事前には活動の趣旨や、日本語を教える時の基礎的な心構えを説明した。事後には活動の振り返りを行った。このミーティングの様子はビデオ撮影を行ない、適宜文字化を行った。活動開始直前の9月のミーティングはハワイとも結び、顔合わせを行った。活動中は実践女子大学と京都外国語大学のスケジュールを合わせるのが困難であったため、ミーティングやスタッフからの指示はそれぞれ個別に行っていた。

4. 実践の成果

ここでは、実践の成果について概説する。この活動は、ハワイの学習者が日本語を学習する活動であるとともに、日本人学生が、日本語教育、異文化交流について学習する活動でもある。この実践報告では特に後者について述べる。

3ヶ月にわたる実践の結果、院生4名には特に「教える」ということの意識に関する変容が見られた。まず、以下は最終ミーティングにおいて、「活動を通じて自分が変わったと思う点は何か」という質問に対する答えから抜粋したものである。

「教科書を進めようという意識から、コミュニケーションするための関係を

作ろう、という意識になった。信頼関係が大事だと思った。(岩崎)」

「当初から「学習者が求めていることに応えたい」という意識で望んでいた。

また、褒めることを意識するようになった。(荻原)」

「今まで個人レッスンをしたことはあったが、学習者のレベルは高かった。今回、初級の学生に教えることの難しさを知った。日本語だけで話すというよりも、お互いが、お互い話していることをわかりあう、ということが大事だと思った。(中野)」

「最初は「教えなきゃ」という気持ちでいっぱい、空回りしていた。

だんだん自分も「教えてもらう」というように気持ちが変わった。

教える、という気負いがなくなってから、コーディーさんが色々と話してくれるようになって、一人で劇とかして説明してくれるようになった。こちらが「わかるわかる」と反応していると、コーディーさんも笑って話すようになった。(山上)」

4人とも、教授内容そのものではなく、学習者とどう向き合うか、という心構えの面での変容を自覚していることがわかる。その根底にあるのは、教師が学習者に「教える」という一方向的関係からの脱却であり、学習者と信頼関係を築くことがコミュニケーション、そして言語学習の基盤となるのだ、という意識である。「2. 人間の内面的な思考様式にかかわる技量(コンセプチュアル・スキル)」「3. 教員と子ども、教員同士の関係などに必要な技量(ヒューマン・スキル)」が成熟したといえよう。この意識を単に知識として教授されたのではなく、体験を通じて自ら学び取ったという点において、Skype 交流活動の意義は大きい。

以下、5. 以降では実際に活動した4人の学生自身の活動報告を示す。この中でも先ほど変容の基盤として挙げた「教えるという一方向的関係からの脱却」は、例えば以下の様な記述から読み取ることができる。

「特に初級学習者と交流する場合は、「もっとこの先生と話したい」といった信頼感を持ってもらうことや、日本語を勉強したいと思ったきっかけを持続させることの方が重要だと思うようになった。」(5. 4)

「日本人と日本語でコミュニケーションを図ることに交流の価値を見出していると感じ、学習者の意向に合わせて授業内容を変更しようと考えた。」(6. 4)

「活動当初は、私が教えようという気持ちでいろいろ日本のことを伝えようとしたが、私ばかりが話してしまい、一番重要であるはずの相手の発話が少なくなってしまう。そこで、相手に質問をして話を聞くと知らないことばかりで、私も教えてもらおうという気持ちになった。」(8. 4)

また、各人が複数回の活動の中でチャット機能や絵カードなどの教え方を工夫したりすることも読み取ることができる。これは「1. 目に見える実践的技量（テクニカル・スキル）」に当てはまると言える。しかし、重要なのは、4人とも相手の性格やニーズにあわせて活動内容を変えていったということである。これは従来型の1回限りの教育実習ではなかなか体験できないことである。学習者のことをよく見、それを次の活動にフィードバックとして活かすという調整能力を各人が発揮することができたといえよう。

「教えるという一方向的関係からの脱却」という意識の変容と、学習者に対する活動内容の調整という2点に注目して、以下の活動報告を読んで頂きたい。

5. Skypeで築いたハワイとの絆（岩崎瑠莉恵）

5. 1. はじめに

ここでは、筆者（岩崎瑠莉恵）が3ヶ月間にわたり、ハワイの日本語学習者とSkypeを使用して交流を行った活動の内容と、その中で生じた問題点やその解決方法について報告する。

5. 2. 活動の概要

筆者は平成23年9月16日から12月14日にかけて、ファング・ダオさんと交流を行った。交流時間の連絡の行き違いや、約束をした日時にこちらがSkypeを起動して待っていても現れないといった問題があり、3ヵ月の中で実際にSkypeを使用して交流したのは計5回であった。

5. 3. どのように問題点を解決したか

第1回目に予定していた交流では、当初、知らされていたダオさんのSkype可能時間と実際に交流できる時間が違ったのか、約束していた時間にSkypeを起動して待っていてもダオさんが現れなかった。Facebookを使用してメッセージを送ると、「ちょっとまって」という返事があり、その日は結局Skypeを使用して交流することはできず、いつSkypeをすることができるかといったようなメッセージのやりとりを数通行った（互いがFacebookを起動している場合は、チャットのようにリアルタイムで短い文章を送り合うことができる）。その後も、予定した時間に現れず、メッセージは返ってくるがSkypeを使用した交流はできないということが何度かあった。返ってくるメッセージも解説が難しい日本語や英語が多用されていて、ダオさんがこちらに何を伝えた

いのかなかなか理解することができず、困惑した。初めて Skype を使用して交流することができた際やその後の交流でも、こちらの日本語がなかなか伝わらなかったり、ダオさんが日本語を使用することをあきらめて英語で話してしまったりした。その際にも、Skype のチャット機能を利用したり、イラスト描いて示したり、レアリアを用いたりして、何とかコミュニケーションをとった。

このように筆者たちの場合は、チャット機能があったおかげで何とかコミュニケーションをとることができた。Facebook を使用したメッセージのやりとりは 3 ヶ月間で計 374 通に及んだ。当初は、送られてくるメッセージの中にも誤用が多く見られたり、英語を多用していた。しかし、Skype での交流や、メッセージのやりとりを続けていくうちに、誤用や英語が減っていった。メッセージが返ってくる間隔も以前より短くなった。また、これまでは使用していなかった語彙も使用するようになり、語彙のレベルも上がったように感じた。

5. 4. どのような変化があったか

これまで初級の日本語学習者と交流した経験はなく、Skype を使用した交流も初めてのことであったため、日本語を教えることの難しさやコミュニケーションが上手くとれないことへのもどかしさを改めて感じた。活動を始めたばかりの頃は、学習者の中には意欲の低い学習者もいるのだと知って落胆したこともあったが、ダオさんと交流していくにつれて、学習意欲を持たせて高めることも教師の役割の一つであるのだと思うようになった。教科書を進めること、正しい日本語を教えて話せるようになってもらうことだけしか頭になかったが、特に初級学習者と交流する場合は、「もっとこの先生と話したい」といった信頼感を持ってもらうことや、日本語を勉強したいと思ったきっかけを持続させることの方が重要だと思うようになった。そして、ダオさんは、誤用や英語の多用が減り、使用する語彙が豊富になっていった。このことは、非常に喜ばしい変化であった。

5. 5. 終わりに

こちらが日本語を教える立場ではあったが、日本とハワイの文化の違いなどを知ったり、英語を教えてもらったりと交流相手から学ぶことが数多くあった。また、交流相手に驚かされることも多く、最も驚いたことは、Skype で交流中の筆者のスクリーンショットを「日本語先生! 日本から来ました」というタイトルで勝手に Facebook に投稿されたことであった。少し戸惑ったが、親しみを覚えてくれてのことだと思うようにした。交流後には、「日本に行ってみ

たい。これからも先生でいて。」というメッセージが送られてきたこともあった。予想していなかったことばかりが起きた3ヶ月間の交流であったが、その分、貴重な経験ができたと思う。交流相手が今後も日本や日本語、日本人に親しみを持って前向きな気持ちで勉強を続けていってくれることを願いたい。そして、この活動を通して学んだ、人に何かを教えるということの根底にあるのは教師の人間性や教師への信頼感であるということを忘れずに、今後も様々な学習者と向き合っていきたい。

6. ハワイとつむぐ新しい日本語教育の形（荻原知世）

6. 1. はじめに

ここでは、2012年9月から12月にかけて筆者（荻原知世）が行った Skype 会話交流活動の具体的な内容と、その中で筆者が気づいた変化について報告する。

6. 2. 活動の概要

筆者は平成23年9月16日から平成23年12月1日にかけて、ケアカ・コバヤシさんと交流を行った。交流は計11回行った。第一回で自己紹介を行い、二回目以降から本格的に会話演習を行った。演習内容は、学習者の学校での日本語授業で課されたスピーチ練習、興味のあるテーマについての会話を中心だった。当初は、学習者の使用している日本語教科書を使用して、Skype で授業をするつもりでいたため、第二回は事前に配布された教科書のコピーを中心に教案を作成して授業に臨んだ。しかし、授業中の学習者は、教科書を使用している会話よりも文化や趣味に関する話題に対して意欲的に発話していたため、学習者が Skype での交流に「日本人と日本語で会話をする」ことを望んでいると判断し、その後は教科書を使用せず会話を中心として交流を行うことにした。

6. 3. どのように問題点を解決したか

ハワイには四季がないため、「春」や「秋」がよくわからないという質問を受けたが、共通のイメージがないため、言葉で説明することが難しいという問題点に行き当たった。解決方法として、Skype のチャット機能を活用した。「秋（あき）= fall」のように伝えた結果、すぐに理解していた。映像・音声だけでなく文字機能も備わっている点が、Skype の強みだと感じた。

6. 4. どのような変化があったか

学習者の変化は2つあった。1つは、漢字の応用である。授業の始めに、筆者の名前の漢字を紹介して意味を説明した。すると、その後、ハワイの地理について説明する機会が出てきた際に、「山に囲まれていて、雨がよく降る」という内容を漢字で示してくれた。具体的には、「山」「雨」「山」のように、「雨」の周囲に「山」を書き、漢字を絵文字のように使用してくれた。授業中に漢字を扱ったことを活かす機転、発想の豊かさに感心した出来事だった。

2つ目は、学習者の日本語能力の向上である。ケアカさんは始めから積極的に日本語を使用して会話をする学習者だった。しかし交流の前半は、こちらの質問に対して答える、話題に対して知っていることを話すことがほとんどだった。後半になるにつれて、「東京で英語の先生になりたい」という夢について、具体的な動機を話してくれるまでになった。「東京で生活するにはいくらお金がいりますか」というような質問も受けた。活動を通して日本で働くことに対する意欲が向上したと話しており、それに比例して学習者の日本語能力も確実に向上していた。「日本語を使いたい」「日本語を使ってこうしたい」という明確な動機が、学習者の能力を向上させるために重要なのだと感じた。

筆者自身にも変化があった。それは、授業で重視する点についてである。筆者は、大学3、4回生時に実践女子大学で留学生のランゲージサポートを担当しており、日本語学習者と1対1で会話をする経験があった。このランゲージサポートは、文法指導よりも学習者との会話を重視したものであり、今回行ったSkypeを活用しての交流と共通するところがあった。しかし、今回のSkypeを活用しての交流は、事前の打ち合わせで「教科書を使用して会話をしながら授業をする」という説明を受けていたため、開始当初は「日本語を教える」ということを強く意識し、「適切な日本語の使い方」を指導することが重要だと考えて臨んでいた。しかし、前述したように、二回目の交流の時点で、学習者は「日本人と日本語で会話をする」こと、日本人と日本語でコミュニケーションを図ることに交流の価値を見出していると感じ、学習者の意向に合わせて授業内容を変更しようと考えた。その際、プロジェクトの責任者である中俣先生に相談し、「無理に教科書を使用せず、柔軟に対応して構わない」というご指導をいただいた。そのため、その後は「間違っていないから、とにかく楽しんで日本語を使ってもらおう」ことを重視して、会話を通してのコミュニケーションを中心に交流を重ねていった。

適切な文法指導と、コミュニケーションを中心とした会話のどちらに重きを置くかを考えた結果、筆者は後者をとった。だが、会話演習の方法は、学習者

によって臨機応変に判断する必要があると感じた。

6. 5. 終わりに

Skype の使用すら初めてだった筆者にとって、Skype を活用して学習者と交流することは未知の体験であったが、11 回の交流を通じて得たものは大きかった。

Skype での交流の最大のメリットは、教室がなくても、世界中の学習者と手軽に交流ができることである。異なる地で活動するからこそ、互いの国の文化や気候の違いなどに気づき、リアルタイムで情報を交換することができた。デメリットは、インターネット上のやりとりが中心であるため、相手に情報が伝わっているかわかりにくい点である。これは、初期の段階で「連絡を見たら必ず返信をする」というようなルールを作るなどして対処していきたい。

この活動を通して、学習者から多くのことを学んだ。様々な話題について会話をした結果、筆者自身も視野が広がり、有益な経験をすることができた。また、学習者の成長を感じられた点は、筆者にとっても喜ばしいことだった。この経験を今後の日本語教育研究に活かしていきたい。

7. Skype で繋がるハワイと日本（中野仁美）

7. 1. はじめに

ここでは、筆者（中野仁美）が約 2 ヶ月間、ハワイの日本語学習者と Skype を活用し交流を行った過程と結果を報告する。

7. 2. 活動の概要

9 月 18 日から 11 月 26 日にかけて、ブランドン・ベレスさんと交流を行った。基本的に日曜日の 19:00（ハワイ 24:00）と決めていて、毎回 30 分から 1 時間程度だった。何らかの都合でその時間帯に交流できなくなった場合は Facebook のメッセージ機能を利用して連絡を取り合い、振り替えの日程を決めて交流していた。

ブランドンさんはオンラインゲームや日本のアニメや仮面ライダーやスーパー戦隊シリーズなどの特撮に興味があり、その話で盛り上がるが多かった。

7. 3. どのように問題を解決したか

ビデオ通話を行うプログラムと聞いていたが、最初は「ビデオがありません」とだけ言われ、困ってしまった。そこで、ハワイの片岡先生とも状況確認等の連絡を取り合い、ブランドンさんへ「カメラが必要である」ということを伝えてもらった。しかし、私達がビデオ通話を使用し交流したのは2回だけだった。ブランドンさんはあまりビデオ通話をしたくないように感じた。このため、ほとんど映像がない状態での交流でボディランゲージや視覚教材が使えなかったが、Skype のチャット機能を利用して文字で示してみたり、教科書をなぞりながら進めたりした。もちろんビデオの映像があった方が交流を進めやすいと思うが、学習者や学習者の都合に合わせて臨機応変に対応出来ればいいのではないと思う。

また、2回ほど3人で交流をするという機会があった。ある日、Skype を繋いだら、ブランドンさんの友人のジェイス・ミツカさんも参加していた。事前に何も連絡がなく、最初は戸惑ってしまった。しかし、ブランドンさんとジェイスさんは同じクラスであり、授業の進み具合も変わらなかったのも、いつものように交流できたと思う。また、友人が一緒だという理由からか、ブランドンさんはいつもよりリラックスして交流できていたように感じた。当時、ジェイスさんは京都外国語大学のペアとうまく交流が出来ていないようで、翌週も3人で交流を行った。ブランドンさんがジェイスさんに分からない日本語を説明してあげたり、代わりに答えてあげたりと、普段の交流より話が盛り上がったと思う。

7. 4. どのような変化があったか

これまで日本語学習者と交流する機会があったが、初級の日本語学習者と交流するのは初めてだったため、日本語を教えることの難しさを改めて実感した。活動を始めたばかりのころは、ハワイと日本の文化の違いや学習者と教える側のモチベーションの差など、戸惑うことも多かった。しかし、お互いが分かり合おうとすれば、良い関係を気付いていけるのだと感じた。例えば、最初はブランドンさんからの発話が少なく、私が一方的に話していたり、質問を浴びせかけるという状態になってしまうことが多かった。それが回数を重ねるにつれて、ブランドンさんからも話を振ってくれることも増えていった。今でもFacebook 上でブランドンさんとやり取りをすることがあり、先日、授業でジェイスさんと作ったという動画を送ってくれた。ブランドンさんの好きな仮面ライダーの話も盛り込みつつ、ストーリー仕立てでハワイの料理（フライドサイ

ミン) の作り方を日本語で説明しているものだった。BGM はもちろん、日本語の字幕もついており、完成度が高かった。交流期間が終わってから数カ月も経っているのに、報告してくれたことが嬉しかった。

7. 5. 終わりに

交流を通して大変なこともあったが楽しく意欲的に活動することができた。また、こちらが日本語を教える立場であったがハワイの学生から学ぶことも多く、充実した交流活動になったように思う。この貴重な経験を生かし、次に繋げていきたい。

8. 二ヶ月間の交流の軌跡 (山上聡美)

8. 1. はじめに

ここでは、筆者(山上聡美)が約2ヶ月間にわたり、ハワイの日本語学習者と Skype を使用し交流を行った際に生じた、問題点やその解決方法、気持ちの変化について報告する。

8. 2. 活動の概要

筆者は9月27日から11月30日にかけて、コーディーさんと交流を行った。交流は週に1回、1時間程度を10回行った。当初は、うまくコミュニケーションがとれず、お互いに歯がゆい思いをしたが、回数を重ねるにつれコミュニケーションがとれるようになった。一日の流れや旅行についてなど、日本語の授業を行ったりもしたが、大体はお互いの趣味や家族のこと、国の習慣や祝日について話した。

8. 3. どのように問題点を解決したか

問題は大きく2つあった。1つ目は、コミュニケーションが上手くとれないということである。8. 2. でも述べたように、活動当初はうまくコミュニケーションをとることができなかった。お互い緊張していたのもあるが、私が簡単な日本語を話せなかったということが一番の要因だった。そこで、事前に「他の国に行ったことがありますか。」「何に乗って行きましたか。」「その国に何日いましたか。」など、どんな言葉を使って質問するかを紙に書いておき交流を行った。すると、だいぶスムーズに相手から回答が返ってくるようになった。また、「他の国に行ったことがありますか。→私は、カナダと韓国、ハワイに行っ

たことがあります。」のように、回答の具体例を考えておき、相手が答えられないようだったら、具体例を話した。すると、質問がわからなくても何をどう答えればいいのかのかわかり、会話が途切れなくなった。2つ目は、授業が上手くできないということである。言葉だけで教えるのは困難と感じたため、カードを作成した。カードは、なるべく文字を大きく書き、漢字にはふりがなをふり、必要ならばイラストもつけた。文字だけのカードよりも、イラストがあるカードの方がわかりやすらしく、反応が良かった。たとえば、「旅行の準備」というトピックでは、以下のように5種類のカードを作成し使用した。

- ①飛行機の時間を調べる。
- ②飛行機を予約する。
- ③ホテルを探す。
- ④ホテルを予約する。
- ⑤荷物の準備をする。

カードを使用するようになってから、授業がスムーズに進むようになり、発言が増えた。

8. 4. どのような変化があったか

コーディーさんは活動当初、「アルバイトは楽しいです。大変ではありません。」のように、あまり複文を話すことができなかったが、活動後は「アルバイトは楽しいですから、大変ではありません。」のように複文が話せるようになった。また、自発的発話も増え、活動当初は、「今日何をしましたか。」や「ハワイは今暑いですか。」など、こちらが質問してばかりだったが、回数を重ねるにつれ、「この動物は何と言いますか。」や「僕は料理が、好きです。聡美さんは好きですか。」など、あちらから質問をしてくるようになった。また、コーディーさんだけでなく筆者にも変化があった。活動当初は、私が教えようという気持ちでいろいろ日本のことを伝えようとしたが、私ばかりが話してしまい、一番重要であるはずの相手の発話が少なくなってしまう。そこで、相手に質問をして話を聞くと知らないことばかりで、私も教えてもらおうという気持ちになった。また、コミュニケーションがうまくとれるようになり、相互理解が深まると、授業もスムーズに楽しくできるようになった。このことから、学習者とコミュニケーションをとり、信頼関係を築く大切さを学んだ。

8. 5. 終わりに

ここでは、筆者がハワイの日本語学習者と Skype を使用し交流を行った過

程と結果を報告した。この活動に参加し、言語を教えるという大変さや、相手の成長を感じられたときの楽しさ、異国のことを知るおもしろさを感じることができた。2ヶ月間の活動で学んだ、教え合うという気持ちや、学習者との信頼関係の築き方などを将来に活かしていきたいと思う。

9. まとめと今度の課題

この実践報告では、2011年度に Skype を活用して行ったハワイの学生に対する日本語教育活動について、参加者自身の報告も交えて報告した。「1. 目に見える実践的技量（テクニカル・スキル）」のみならず、「2. 人間の内面的な思考様式にかかわる技量（コンセプチュアル・スキル）」「3. 教員と子ども、教員同士の関係などに必要な技量（ヒューマン・スキル）」に関しても大切なことを掴んで欲しいという当初の狙いが達成されたことは、各自の報告からも明らかであろう。

しかし、課題もいくつか残った。まずは、活動内容、回数にあまりにもバラつきがあったことである。もちろん、個々の学習者に対して活動内容を調整することは重要であるが、7. 3. の報告のように、ビデオを使えない学習者がいたというのは許容可能な差異を超えている。今後は互いにより万全の体制を整えて行うべきである。また、各大学のスタッフの連携がうまくとれておらず、当初は映像課題を作成するというタスクを考えていたが、結局は果たせなかった。これ以外にも日本側の大学が2箇所にあることは全体でミーティングを行うことを困難にし、また、実践女子大学の学生にとっても他大学の SNS を使って活動報告を行うことは負担が大きかったと考えられる。また、今回、参加したのは大学院生4名であるが、実際にはこのような少人数で活動を行うことは難しく、大規模に行う場合には遥かに経験の少ない学部生が参加することになる。その場合にも、大学院生と同じように活動を遂行できるのか、意識の変容、成長が見られるのか、といったことは、今回の活動からはわからない。

そこで、2012年度はこれらの課題を克服するために、新たな体制で交流活動を行った。まず、新たに中国の湖南大学をパートナーとし、1対1の体制で交流を行った。学部生も含めて13名の学生に参加してもらい、毎回共通のテーマを決めたり、日本語について考える課題を課した。さらに許可を得た学生の会話を録音することにより、会話を種々の観点から分析できるようにした。この原稿を執筆している時点で、交流活動は終盤を迎えている。その実践報告は次号の『実践国文学』で行う予定である。

参考文献

- 岡本佐智子（2005）「日本語教師養成の現状と課題」『北海道文教大学論集』6, pp.121-135
- 曾余田浩史・岡東壽隆（2002）『ティーチング・プロフェッション 21世紀に通用する教師を目指して』明治図書
- 中俣尚己・岸磨貴子・片岡由紀夫（2011）「日本語教員養成における自己効力を高めるための遠隔会話演習の実践」『日本教育工学会第27回全国大会講演論文集』pp.215-216
- 中俣尚己・中西久実子・由井紀久子（2011）「日本語教員養成における Web ダイアリの可能性 ―国内での実践と海外での実践―」『無差』18, pp.69-92
- 由井紀久子・中西久実子・中俣尚己（2010）「実習生の日本語教育能力を高めるためのダイアリー活動 ―紙媒体から SNS へ―」『ヨーロッパ日本語教育』14, pp.100-107

謝辞

本研究の成果は実践女子学園社会情報教育イノベーション研究所ならびに科学研究費補助若手研究（B）「ICTを活用した日本語教員養成のための環境デザイン」（237009940001、研究代表：岸磨貴子）の助成による。

なかまた・なおき 京都教育大学専任講師
 いわさき・るりえ 実践女子大学大学院博士前期課程
 おぎわら・ともよ 実践女子大学大学院博士前期課程
 なかの・ひとみ 実践女子大学大学院博士前期課程
 やまかみ・さとみ 実践女子大学大学院博士前期課程